

府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2010年 秋号 10月13日発行/季刊
発行人：竹内 章
連絡先：府中市分梅町 1-20-3
TEL 042-364-3428

こくしのたち

国司館・府中御殿遺跡の保存決まる

土地購入(27億円)を9月議会で議決

府中本町駅前で発掘された国司館(こくしのたち)及び府中御殿遺跡の保存のための土地購入補正予算案が市議会9月定例会で、全会一致で可決されました。

同遺跡の面積は7812㎡、土地購入予算は27億7680万円です。同遺跡は、年度内にも国史跡の武蔵国府跡に追加指定される予定です。指定を受けると、土地購入費の8割が国から、1割が都から10年分割により助成されます。

日本最古の国司館遺跡として高い評価

国司館は、大宝律令(701年)により、朝廷から全国68カ国の国府に派遣された国司の公邸ですが、単なる官舎としてだけではなく、国府の行政的経済的拠点としての役割をも果たしました。今回発掘された館跡は、大宝律令による国司派遣以前の7世紀に、大和朝廷から派遣された国宰(くにのみこともち)の館の可能性も高く、日本最古の国司館遺跡としての高い歴史的評価が寄せられています

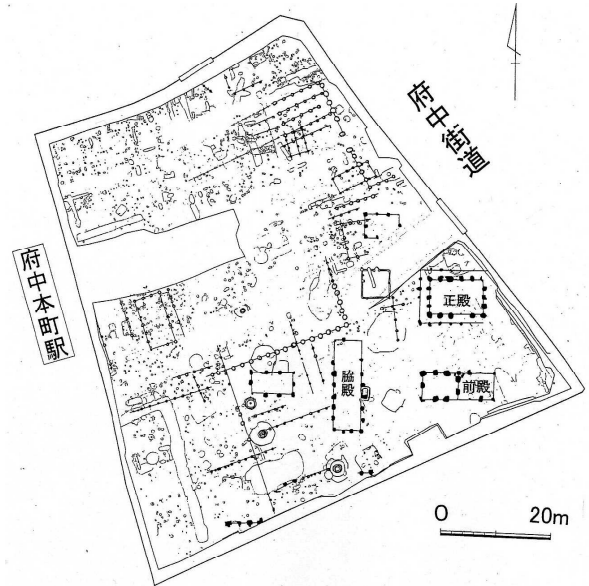
秀吉を迎えた家康府中御殿

府中御殿は、戦国大名であった徳川家康が1590年に築造しました。会津若松等に遠征、奥州仕置を發して天下統一を果たした豊臣秀吉を迎えるために、家康は府中御殿の築造を急いだと記録されています。

家康は、將軍即位後も鷹狩や鮎漁の際に、頻繁に府中御殿に滞在しました。当時の鷹狩は単なるレクリエーションではなく、軍事訓練や民情視察的な色彩が濃く、府中御殿は、徳川幕府の統治体制を強める拠点としての機能を果たしたといえます。

家康が亡くなり、靈柩が日光に遷座される際には、府中御殿に2日(1日の説もある)間安置され、法要が営まれました。このことから、府中御殿と家康の結びつきの深さが判ります。

今回発掘された遺跡からは、このほか、古墳時代前期(4世紀)や室町時代など、各時代の遺構・遺物が見つかっています。正に、古代から近世にいたる府中の歴史を凝縮した、貴重な歴史的遺産と言えるのではないのでしょうか。



発掘図(右上:府中御殿遺構 右下:国司館遺構)

当初は大規模小売店舗の建設を予定

本年6月議会の、遺跡の保存を求める一般質問に対し「わが国の歴史上、大変重要な遺跡との文化庁等の指摘を重く受け止め、駅前という立地や財政課題を考慮した上で保存の可否を検討する」と野口市長は答弁しました。

当該地は、当初、8月に閉店したイトーヨーカドー府中店が地権者から購入し、新店舗を建設する予定でしたが、渋滞対策など警察との交通協議が整わず、イトーヨーカドーは、出店を断念しました。

駅前一等地での商業振興の優先を求める声がある中で、市が土地購入を決めた背景には、文化庁や日本考古学協会など各界からの高い評価とともに、遺跡説明会への過去最多の来場者数など、市民の強い関心と要望があったことがあげられます。その根底には、当然、市民・事業者の協力によりこれまで35年間にわたる1500か所の地道な遺跡調査など「歴史のまちづくり」を進めてきた市の基本姿勢が伺えます。

市民参画で建物復元など遺跡整備計画を

現在、本発掘地の南側隣接地に、14階建のマンション計画が出されています。遺跡からの眺望、景観の保全など早急な対応が必要です。また、国司館、府中御殿の復元を含めて本遺跡の整備計画が、府中市民の未来への遺産、資産としてどのように保存し活用されるのか、25万市民が参画する取り組みが求められます。(村崎啓二)

米づくりの苦勞と さまざまな発見

草取り・虫探しの巻

田植えから1ヵ月余り、7月17日(土)は二回目の学校「草取り&生き物探し」を行いました。猛暑の中、生徒34名・保護者28名・スタッフほか29名の総勢91名の参加がありました。田んぼの学校は、身近なところで農体験と生き物探しができることが好評で、多数の応募がありました。やむなく抽選で入学を決めざるを得ませんでした。参加された生徒と保護者の皆さんは自宅でのバケツイネの栽培と観察も含めて、親子で楽しまれているようです。

今回は、主に「機械除草」「手取り除草」「生き物探し」を行いました。盛りだくさんの内容でしたので、時間や体力的なことが心配でしたが、無事に楽しく過ごせることができました。

重いなあよいしょよいしょ！(手押し除草機)

昭和30年初頭までは、除草機をかける風景がみられましたが、今では除草剤散布が主流になり、重労働の手押し除草機作業はなくなりました。親子共々、初めての体験に挑戦です。除草機は子ども1人では思うように動かさないほどの重さがあります。保護者やスタッフと一緒に力を合わせて、一所懸命に除草機を押してくれました。だんだん慣れるにしたがって、コツが分かり、「ちょっと引いてから押すといいんだ」といったことも分かりました。

イネとイネの間に除草機を通すことで、雑草が倒され、土にもぐらせることができました。これにより、雑草の勢いを劣らせることで、イネが元気に育っていきます。昔ながらの除草機を使い「昔は大変だったんだね」と子どもも大人も汗をかきながら、農業の大変さを実感することが出来ました。

根こそぎ引っこ抜け！(手取り除草)

手取り除草では、地道に手で雑草を取っていきました。ウキクサが大量にあった他、コナギ・オモダカ・イグサなどの水草が多く見られました。

イネとヒエは似ており、判別がむずかしく「あっ、イネを抜いちゃった」といった声もあり、大変難しい作業もありました。雑草がなかなか抜けず、しりもちをついてお尻がどろんこになっても、真剣に雑草を取る姿がとても印象的でした。



なんだ！この生き物？(生き物探し)

最後に、生き物探しを行いました。農薬使用で、田んぼの昆虫や小動物は少なくなっていますが、水生昆虫とイネの周りの害虫・益虫探しの両方を体験しました。

手取り除草の際に、水中の生き物探しも行いましたが、ここでは主に“コミズムシ・アメンボ”などがいました。中には、珍しいギンヤンマのヤゴも見つけた人もいました。

イネにつく虫探しでは、みんな網をかまえて“いざ出陣”とばかり元気に生き物を探しました。見つけた生き物は、“アキアカネ・シオカラトンボ・カマキリ・アマガエル・トウキョウダルマガエル・シジミチョウ”などでした。たくさんの生き物が見つかり、都会の水田が、生き物のすみかとしてとても重要な場所なのだという事を実感しました。

また、見つけた生き物を図鑑で調べたり、顕微鏡で見たりしましたが、中には図鑑にも載っていない小さな生き物も見つかりました。参加者同士で「これは何の虫だろう？」「どこで見つけたの？」などと話し合い、交流が深められたようです。子どもだけでなく、お父さんお母さん方もとても楽しそうに生き物探しをしていました。

うちのイネ、だいじょうぶかなあ！

(バケツ稲相談コーナー)

今年は、田んぼの学校の実施回数が例年より少ないので、“バケツ稲”の観察を重視しています。バケツ稲とは、バケツを用いて家庭でイネを育てるものです。参加者のほとんどの人がバケツ稲を育てています。「ぐんぐん育って元気です！」といった声がありました。

しかし、なかには上手く、イネが育たないことも。そこで“バケツ稲相談コーナー”を設け、相談にのっています。

今年の特異な事例は“枯死と風による茎折れ”です。「茎が折れちゃった…どうしたら良いですか？」「枯れてしまった…」といった方が6名も。枯死の原因は、持ち帰ったイネ(苗)の水分切れによる根の枯死か、肥料不足か、それとも苗を植える土づくりなどが推察されます。茎折れは、ダメージが大きいので、今後は支柱立てる“風対策”もマニュアルに追加することにしています。

バケツ稲の収穫まで、スタッフも全力で、サポートしていきたいと思っております。何か相談したいことや質問がありましたら、気軽にご相談するよう、よびかけています。

(農工大学大学院 修士1年 野木 佑真)



さあ、稲刈りだ 実いを祝おう

田んぼの学校・稲刈りの巻

台風12号は東にそれ、猛暑から寒い位の9月25日、「田んぼの学校2010」の稲刈りを農工大学本町農場で行いました。田植えから113日目です。

参加は、生徒35名、父母25名、スタッフ19名(市民の会17名、農工大4名など)計79名です。

待望！・田んぼに移動

田んぼに入る前に各生徒は、慎重に自分で植えたイネの観察と測定をして記録し、刈り取って持ち帰る準備をしました。家に帰りバケツ稲との比較も楽しみです。

さあ、待望の田んぼ入りです。しかし田んぼは、ここ2日ほどの雨で田植えや草取りの時のようにヌルヌルの状態でしたが、一人として敬遠しません。黄金色にたわわに実る稲を目の前にし、早く稲刈りを！とはやる生徒の気持ちは理解しつつも、稲刈り鎌の使用は危険もあり、乾燥させる「はざ架け」もありますので、スタッフが丁寧に実演指導を行いました。

いよいよ稲刈り

自分たちで植えた稲刈りは初めての体験です。みんな楽しさのうちにも「米づくり」のこれまでの経過を思いながら一生懸命でした。刈り取った稲はぬかるみのため板敷きの上で手渡しし、田んぼの横で小さく束ねて「はざ架け」をしました。最後にミレーの名画に習い「落ち穂拾い」をして収穫完了です。10日間ほど乾燥し、脱穀の作業になります。天候に気をもんだ稲刈りも全て無事済み、みんなで安堵しました。

参加者一同で記念写真を撮り、アンケートを出し、今年第3回目の田んぼの学校の授業は終わりました。小学生に稲刈りの感想を聞いてみましたが、皆開口一番「楽しかった」。田植えのときのように泥んこでも、トウキョウダルマガエルやカマキリを捕まえるなど、素晴らしい体験



鎌の扱い方、刈りかた、束ね方の説明にも真剣な眼差し

だったようです。

収穫の稲・コシヒカリとベニロマン

去る6月5日に、コシヒカリとベニロマンの2種類の田植えをしましたが、今回稲刈りをしたコシヒカリは刈り頃でした。

一方、古代米のベニロマンの籾の中は未だ未熟で10月中頃にならないと稲刈りは出来ません。

稲の特徴は、コシヒカリはコメの味ランキング日本全国1位で一番多く栽培されています。紅ロマンは赤米で対馬赤米を改良して、九州地方で栽培されています。



刈り取った稲を束ね、「はざ架け」の準備

今年の異常高温と米づくり

今年は7月の梅雨明けから9月上旬まで猛暑続きでした。多くの人が「猛暑はもう御免こうむりたい」と宣言したことでしょう。稲のルーツは1年中暑い赤道付近の生まれです。今、日本で栽培されている稲は、赤道付近よりも温度の低い日本に合うように品種改良されていますが、今年の猛暑に我慢し耐えてきたことでしょう。

気象庁によれば、今年の夏の気温は統計を取り始めた1898年以降112年間で一番気温が高い年だったそうです。そのうえ8月の降雨は平年の14%ですから、猛暑のうえにカラカラに乾燥していたわけです。こうした気候は稲づくりにも当然良くなく、今後は高温に強く、美味しい新品種を生み出す研究が一層高まることでしょう。

田んぼの学校に参加した生徒に期待

泥んこになり、暑さに負けず、田んぼの学校に入学した生徒一同は「かけがえのない体験」をしたことと思います。この米づくり体験で新しいこととの出会いが、生徒の心身に沁み込み、特に小学生は稲と環境などを通して、府中の「原風景」を抱いてくれることは間違いないと思います。また、美しいものと醜いもの、良いか悪いかを見分ける「審美眼」となり、今後一段と充実への糧となることを期待しています。(府中かんきょう市民の会スタッフ 大崎清見)

畑の学校 スイカまつり



府中市シニアガイドブック”楽しくらそうふるさとふちゅう”に紹介記事があります。また最近では、広報ふちゅう(10.5.21)のNPO・ボランティア団体紹介記事にも「野菜を育てる喜びを“畑の学校”」と掲載され、市民に知られるようになりました。

また市民の農業体験への関心に応じて“秋の市民活動・みて・あるきツアー「府中NPO/ボランティア活動センター」の見学・体験先にも選ばれました。会員も21名に達し、試行錯誤を重ねながら、分室(校)を求めるほどに成長しています。

「登校」率向上や全員参加農作業体験等の問題点がありますが、概ね「合格」と自己評価しています。

今年で3年目に入りますが、発足時の基本方針(1.協同耕作、2.循環型農業(環境にやさしい農業)を目指す、3.収穫物はみんなで分配する)に沿った会則をつくり、試行錯誤をしながら自然相手の農業生産を体験学習しています。年間作付けする野菜の種類は旬のものなら何でもあるといった状態で、年間40種ほど栽培し、成果をあげています。

希望登校日を聞き出欠をとる、農園主の指示指導に従う(必須科目と称して作付け野菜の種類を指定)、区画の責任者を定め協働者との調整、栽培日誌の作成、余裕のある人には選択科目の習得は拒まない、情報交換、農園仲間意識の向上に、月1回全員登校日を設け、試食会の催しをする等の運営をしています。

農作業を強制するのではなく自分が播種して育てた作物をいとおしむ気持ちの醸成に期待しているのです。愛情をそそぐと、工夫や努力も惜しまず、注ぎ込むようになる、との信念です。

今年は、夏の行事(試食会)を“スイカ祭り”と呼ぶことにしました。春の全員登校日の“イチゴ祭り”も好評でした。スイカに隠れ、トウモロコシ(時期やや遅し)、トマト、エダマメ(最盛期過ぎた)なども試食に供し好評でした。マクワウリを品揃えしようと思っていたのですが、熟期が間に合わず残念でした。

自分たちが作ったのは、みな美味しいです。今年は美味しかった小玉スイカの種子とツタンカーメン王陵のえんどう豆種子を保存しています。皆さんも美味しかった野菜の種子を保存して来期植えてみては如何でしょう。トマトは援農先の切り取られた側芽を活用・再生する栽培法も成功しました。

今夏は異常気象で猛暑の連続でした。50日近く雨らしいものがありません。その中で元気なのは、皇帝ダリア、ゴーヤ、モロヘイヤ、サツマイモ、カボチャ、オクラといずれも南国原産のもので、キュウリ、ネギ、フダンソウ、サトイモなどは大打撃です。どんな時でも、季節の野菜が収穫できる「畑の学校」でありたいと願っています。

みんなのうれしそうなお写真を見て、食材の栽培、準備に尽力した会員の努力に感謝し、来期はスイカ以外の食材を豊富にし、家族同伴のスイカ祭りにしようと思っています。

(竹田 勇 畑の学校々長)

最新鋭の横浜清掃工場 など見学 第11回バス見学会



降りしきる雨の中訪れたエリスマン邸（「日本現代建築の父」と呼ばれたA. レーモンドの設計）

「府中かんきょう市民の会」の第11回目のバス見学会は9月28日に実施しました。参加は会員23名、一般市民19名の計42名で、横浜の「港の見える丘公園」並びに周辺西洋館等の見学と横浜市資源循環局金沢工場発電所見学が目的です。

横浜に近づくにつれ雨脚は激しさを増すばかりでしたが、当初の計画通り脚に自信のあるグループは階段・坂道を使い公園展望台まで登りました。一方、雨による安全面並びに体力面からエレベーターを使用し展望台まで登ったグループの二手に分かれました。展望台は晴天であれば横浜港、ベイブリッジがきれいに見える所ですが雨とガスで視界は利かず、かろうじて見える程度でした。

本来の計画ではここで解散し自由行動の予定でしたが、強い雨のため同一行動を取る事になり、横浜市イギリス館を見学しました。イギリス館は昭和12年に英国総領事公邸として建築されたモダンと伝統を加味した重厚な美しい建物です。見学者一同天井の高さからくるゆったり感に感心していました。バラと芝のゆったりした庭園とも相まって往時の英国風生活に思いを馳せました。雨で川のようになった街路を歩き、

次に外人墓地を訪問しました。静かに眠る人々の名前等を記載した一覧石板が入り口横に設置されており、国籍もイギリスやフランスなど多彩であり、死因も暗殺？、自然死？と記載があり軍人は暗殺？が多数でした。開港時の魍魎魍魎の結果でしょうか。

さらに激しい雨脚のなか、外人墓地から徒歩5分のエリスマン邸を見学しました。エリスマン邸は「日本現代建築の父」と呼ばれたA. レーモンドの設計によるもので、大手絹糸貿易商会の支配人エリスマン氏の私邸として大正15年に建築されました。往時の絹糸貿易を手掛ける会社の支配人の経済状態及び建物の洪さに一同感嘆。

その後、昼食をすませて、第二の目的地である金沢清掃工場に向かいました。バスはほどなく金沢地区の埋め立て地

に建設された横浜市資源循環局金沢工場に到着しました。

工場では先ず20分ほどのビデオで横浜市のごみ対策要領並びに金沢工場の設備概要の説明がありました。

横浜市ではごみを「捨てる」から「活かす」へ、資源循環型の住みよい街づくりを目指しており、ごみ対策の標語は「ヨコハマはG30（ジー サンジュウ）」。

Gはごみ、原料あるいはGarbageの頭文字で、これを30%減らそうと言うものです。

金沢工場は現在横浜市に設置されている5清掃工場のなかで最新鋭の工場で、平成13年に建設され、処理能力は日量1200ト（400t炉が3基）。現在は2炉を稼働させ日量800t処理しています（1炉は予備）。処理量が減ったのは市民の協力でごみ量が減った為との事です。

工場の特色は、

①最新鋭の排ガス処理設備を導入、公害防止に万全を期している。

②隣接下水処理施設との「発電電力」「再生水」「消化ガス」の需給等、エネルギーの有効利用の促進。

③焼却灰を溶融し、道路路盤材に有効利用・・・などの概要説明の後、工場見学に移りました。

一同、設備の巨大さに驚くと共に、殆どコンピュータ制御されている工場のクリーンさにも感心しました。

見学の途中でダイオキシン対策や再生材の有効利用方等の説明も受け、横浜市が如何に真剣に取り組んでいるかを理解すると共に、我が府中市も当然取り組んでいるとは思いますが、我々住民をベースに、更に進んだ取り組みを行なって行かなければいけない、と感じました。

見学は参加者の熱心な質問などで予定時間を超えてしまい、駆け足でバスに戻り帰途についたほどでした。午後4時半、バスはまさに予定通り大國魂神社前に帰着し、第11回バス見学会は無事に終える事ができました。

（佐藤眞澄）

最新鋭の横浜・金沢清掃工場。ゴミ搬入ピット（右上）。自動化された炉へのゴミ投入装置（右下）。ゴミ発電タービン（左上）。コンピュータ制御室（左下）。



府中かんきょう塾2010参上記

講談師参上

「親の意見とナスビの花は、万に一つの無駄も無い」、
「これ知ってる人」。皆さん反応なし。

多摩川左岸の高水敷を、大丸堰から稲城大橋へブラブラ歩いていると、所々にワルナスビが群生しています。刺の多い、庭や畑に生えると始末の悪い草です。ナス科ナス属は、花の実つきが良く、昔から農家ではそう言って子供を教育したのですが、今時は流行らない。

さて、「かんきょう塾ネット」企画・運営の、「府中かんきょう塾2010 多摩川の植物観察と水質調査」が、7月31日(土)、多摩川の大丸堰-稲城大橋間で催されました。筆者に講師として声がかかり、専門外なので躊躇しましたが、「かんきょう塾ネット」は、当会の仲間が多く運営に携わっていて、無碍に断ることも出来ず、講(談)師として、厚かましくも、参上した次第でありました。

かくて、分類学に疎い小生の癖は、冒頭の如き異端の植物漫談と相成ったのであります。

泣き濡れる愛の草

参加者の中に小学生が二人いました。イネ科の植物が多く、比較的变化に乏しい高水敷を歩いても、小学生には退屈であります。

「ホラ、ここでキリギリスが鳴いているぞ」。ススキの葉の上で鳴くキリギリスを見つけてやれたのが、せめてもの慰めでした。(実は大人も珍しがっていた。)

そう云う高水敷から眺めると、オギの群落、ススキの群落、ツルヨシの小さな群落が見えます。これも河原の植物相の特徴として話しますが、参加者はどうしても、足下の草に目が行きがちです。メヒシバ、ネズミムギ、エノコログサ、少し背の高いセイバンモロコシ、等等。



シナダレスズメガヤを見つけて、「この草は、Weeping Love Grass、泣き濡れる愛の草とも云われます」等と、色をつけて話すのが精一杯でありました。なお途中足下に、絶滅危惧種のカワラサイコを見つけて、紹介出来たのは幸いでした。



成人向け「雌蕊先塾」のお話

是政橋のたもとに、オシロイバナが咲いていました。「成人向けの癖です、この花を良く見て下さい。」

「雌しべが、雄しべを差し置いて、長く伸びていますネ。」
「これは浮気の奥さんです。他の花からの花粉を物色中です。」

「こっちの雌しべを見て下さい。内側に曲がってきました。外の花粉を見つけれず、家に戻って来たのです。」「これから旦那サンと仲良くする魂胆ですね。」

植物には他花受粉によって、より良い子孫を残すために、雌蕊先塾、雄蕊先塾と云う仕組みもったものが、しばしば見られるものです。(因みに、河原には無かったのですが、キキョウの花は、雄蕊先塾です。)

今年の暑さは、まさに異常でした、この日もご多分にもれず、猛烈な暑さ。大丸堰から稲城大橋までの予定でしたが、途中是政橋との中間辺りの、エノキとオニグルミの木立の中で一休みして、折り返すことになりました。主催者の好判断でした。

この日、河川敷の野球場で練習していた子供が、熱中症になったらしく、救急車が来たくらいでしたから。

復路は、低水敷で、途中2カ所の川の水をサンプリングし、簡易COD測定での水質検査です。

何れも、基準をやゝ上回り、参加者は多摩川の水が完璧でないことを実感していました。(椋島弘通)

第9回

小川の生き物ウオッチング

8月1日(土)、今年で第9回目の「小川の生き物ウオッチング」が四谷2丁目の農業用水路で行われた。多摩川でも市主催の「多摩川水辺の楽校」 ”ガサガサ魚とり”が年に数回開催されている。

四谷の小さな用水路で多摩川と同じようなことを行っているわけを、簡単にふれておきたい。四谷2丁目付近は田んぼが広がり、昔と変わらない農業用水が流れ、屋敷林の森と調和して市内に残る貴重なふるさと景観である。(当会では、この景観を将来にわたって残すよう市に働きかけを行っている。) 小川には小魚が、田んぼにはアマガエル、そして青田そよぐ空にはトンボ、初秋には畦にヒガンバナが彩りを添える…。催しに参加した父兄は一樣に、府中に昔とかわらない自然が残っていることに驚く。子どもたちには私たちがその昔夢中になった田園の中での魚とりの楽しさを体験して欲しいと願っている。また、魚を経年的に調べることで、生き物の生息状況の変化を記録することも目的の一つである。

前置きが長くなったが、今年の参加者は、23名うち子どもが13名で幼児(最年少は3歳)の参加が多い。他に当会のスタッフと農工大の関係者が13名参加した。用水は水量が多く親子同伴とはいえ、幼児が本流に入るのは危ぶまれる。また猛暑のなか熱中症も心配である。しかし、魚とりが始まると子どもたちは元気一杯。最初は浅いところでやってもらっていた幼児たちも、みんなと一緒にパンツが濡れるのもかまわず水遊びを楽しんでいた。この子どもたちの笑顔を励みに今まで催しを続けてこられたのかもしれない。



今年の多摩川は猛暑で水位が下がって不漁が続いているが、小川ではみんなが頑張ったおかげでオイカワ・アブラハヤ・コイ・ギンブナ・タモロコなど92匹と、昨年(74匹)を上回る漁獲だった。いつものように子どもたちがとった魚を一匹ずつ同定し、11時過ぎに午前の部を終了した。

今日とれた生きもの		
オイカワ	21	ヒメダカ 1
カワムツ	1	計11種
アブラハヤ	42	ハゼのなまこ 1
コイ	7	アメリカザリガニ 11+0
ギンブナ	5	エビ 12
タモロコ	7	タニシ 10
モツゴ	4	ミゾミ 1
ドジョウ	2	ヤゴ 1
シマドジョウ	1	トウキョウアマガエル 5~6
		ニホンアマガエル 4~5
		92個体



魚とり終了後、スタッフは用水組合にお願いして刈り残してもらった小川の草刈りをおこなう。(暑い中、身にこたえる作業をしていただいた方々には感謝…) 四谷文化センターの講堂で昼食ののち、農工大出身の皆川さんよりクイズをとおして楽しくわかりやすく話があった。(今年のテーマは稚魚の見分け方。) 行事終了後の反省会では「子どもたちが疲れるので行事は午前中に終了させたほうがよい…」 「もう少し参加者が増える工夫を…」 など意見交換をして終了した。(野口道夫)

白糸台掩体壕が小学教科書に

来年4月から市内小学6年社会科の授業で使用決まる

市民の粘りつよい保存運動により、府中市は白糸台掩体壕を平和都市宣言20周年を機に、平成20年11月市文化財(史跡)に指定しました。正式名は“旧日本陸軍調布飛行場白糸台掩体壕”です。考古学の分野においても近年、戦時下の遺跡が研究の対象として重視されるようになり、考古学者として著名な坂詰秀一氏は、府中市の公有地化と発掘・保存整備事業を高く評価していることが報道されました(2010/8/5、東京新聞夕刊)。

今年は、新学習指導要領に基づく小学校教科書が採択されることと併せて、白糸台掩体壕が小学6年社会科上巻に掲載(教育出版社版)されたという情報を得て、その採択を注目していました。

去る8月の府中市教育委員会は、地元の掩体壕が、掲載された教科書を採用したいとの委員の意見を踏まえて、来年4月から府中市の小学校で使用すること決めました。

平和の尊さを見つめる機会として、教科書による授業は大変効果的です。「体験者の減少」「若者の無関心」など戦争の風化が進む中、遺跡に語らせるという手段と共に、戦後世代が新たな語り部として、登場が求められる今日、大変タイムリーな出来事であり、市の文化行政と教育部門の連携と

市民・市民団体との協働により、地元の歴史遺産をいかに活用するか、大きな期待が寄せられています。

本格的保存整備で、早期の公開を!

平成20年度実施設計プラン作成、21年度にコンクリート補強や防さび処理などの応急処置を実施しました。しかし、公開するための整備、例えば遺構(構造物)の耐震化、解説板等のビジュアル化や戦争の記憶を語る記念物としての空間の演出、最寄駅からサインを含めた見学ルート設定などの本格事業の予算は残念ながら計上されず、現地はフェンスに囲まれたままで、見学できません。来年4月から教科書を使って授業が始まるので、先ず教職員の現地研修や研究授業を期待しています。そのためにも23年度予算計上が望まれるところです。

保存する会は、すでに掩体壕の保存整備と活用について要望しておりますが、教科書掲載という新たな事態に対して改めて、市と意見交換の場を考えています。今まで、文化財担当を窓口にしてきましたが今後、教育委員会にも、働きかけをしたいと思えます。いずれにしても庁内関係部課間の連携が必要でしょう。

またこの間、教科書採択における委員会傍聴や教科書のことについて、種々、情報提供頂いた、「子どもと教科書を考える府中の会」に対して、厚くお礼申し上げます。(黒崎 啓 調布飛行場の掩体壕を保存する会)

教科書に掲載された内容

小学社会6年上巻 (教育出版社発行)
来年4月から市内小学校で使用予定

地域に残る戦争遺跡—東京都で調べた例

最初の空襲による被害 (東京都葛飾区)

1942年4月18日、東京は初めての空襲を受けました。この空襲で、水元国民学校の児童が機銃掃射を受けてなくなりました。当時の校舎を移築した葛飾区の教育資料館には、この時の弾と弾痕が展示されています。



戦闘機をかくした壕 (東京都府中市)

空襲では、重要な軍事基地がある場所もねらわれました。軍の飛行場があった府中市には、空襲で破壊されないように戦闘機をかくした壕(掩体壕)が残されており、市の文化財に指定されています。



単元4 戦争から平和へ(30頁)

◇戦争から平和の歩みを調べよう・・・戦中と戦後に分けて掲載。
(中見出し)／戦争と人々の暮らし／中国との戦争が始まる/アジア・太平洋に広がる戦争/戦争と国民生活の変化／子どもたちと戦争／おそいかかる空襲に “地域に残る戦争遺跡—東京都で調べた例”として“戦闘機をかくした壕”(東京都府中市) が掲載されている。